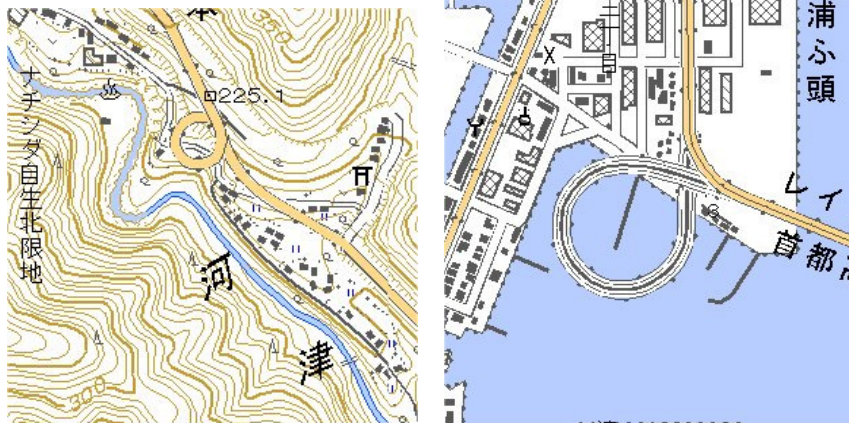


地図の中にスパイラルなものを読む



河津七滝ループ橋（静岡県） レインボーブリッジ（東京都）
国土地理院発行 1/25,000 地形図「湯ヶ野」「東京東南部」

ループあるいはスパイラルになった構造物といえば、何ととっても道路や鉄道です。

こうした構造物は、インターチェンジなどを除いて全国に約 140 か所もあるそうです。図の左は、静岡県賀茂郡河津町内にある国道 414 号線の河津七滝ループ橋です。

この地図をはじめて見たときには、一瞬「あれ！」と思うでしょうが、この程度なら現地の状況を知らなくても、道路（橋）がカーブを描いているようすが読み取れます。

このように、地図は無限遠に視点をおいて、地球表面のようすを表現したものですから（正射影といいます）、原則として立体になった構造物の最上部だけを表現します。重複部分や地下のようすは表現しません。

右の図は、東京の芝浦ふ頭と、お台場を結ぶレインボーブリッジの一部です。

レインボーブリッジは、他の大型架橋と同じように、大型客船が自由に通過できるように設計されていて、約 50m もの高さがあります。ところが、つい先ごろのニュースでは、橋の設計が豪華客船の大型化に後れをとっていて、この高さでも自由航行できない大型客船があるそうです。最新の豪華客船は、レインボーブリッジより奥には航行できないというわけです。

それはともかく、この場所をまったく知らない人なら、地図を詳細に見てもレインボーブリッジにはそれだけの高さがあるって、2 階建てになっていることなど分かりません。ましてや、鉄道の“ゆりかもめ”（黒色）が、ループ状に巻いた坂の軌道を 50m ほど上っていて、その他の部分では高速道路橋（茶色）の下にある 1 階部分を走っているのを読み取るのは難しいでしょう。

地図は、このような重層的な構造を平面に表現するには限界がありますが、製作者の腕の見せ所でもあります。そこで重要なのは、「立体的」にみせるための仕掛け、「微量の白部（相互の情報に小さなすき間を作ること）」なのですが、多色刷り地図が普通になった今

では、これはややおざなりになっています。

それでも、これほど超有名スポットなら、他からの情報もあって、何となく感じはつかめるかも知れません。下図は、かなり複雑な形をしている岐阜県郡上市の北陸自動車道白鳥 IC 付近の地図です。

「どれが上で、どれが下？」、こんどは立体形が、正しく読み取れましたか。

「微量の白部」に注意して、正しく読み取れたら、“地図読み人”として合格です。正しく読めないという人には、カーナビの地図などのデジタル地図データが、複雑な道路を鳥瞰表現で容易に見せてくれるでしょう。



郡上市油坂峠付近

国土地理院発行 1/25,000 地形図「白鳥」

【散歩の途中で】

「ループ橋」などを、“ぐるぐる”まわる

- ・河津七滝ループ橋から、河津七滝、天城峠、湯ヶ島温泉へ
- ・レインボーブリッジから、お台場、大江戸温泉へ
- ・白鳥 IC から、九頭竜湖、九頭竜温泉へ
- ・音戸大橋から、倉橋島、江田島へ

日本図の周りにあったもの



鹿鳴館の辺り
国土地理院発行「五千分一東京図」

今人気の篤姫の舞台から連なる明治新政府は、いわゆる薩長土肥などの諸藩の主導で発足しますが、実務の面では旧幕府の優秀な技術者なども加わった全員参加の大改革ともいえます。

陸軍と係わりの深い地図測量の分野でも事情は同じで、当初は旧幕府技術者も参集して事業が進められます。その徳川幕府は、フランスの軍制を範としていたことから、明治初期、日本の地図作りはフランス式でした。

残された当時のフランス式地図の原図は、古書店などで見かけるカラー写真以前の絵葉書と同様に手彩色が施されたもので、それは美しいものです。

特に、明治 16、17 年作成の東京図は、5 千分 1 と比較的大きな縮尺であることから、地図が苦手の人にも当時の方が手にとるように分ります（「五千分一東京図」）。

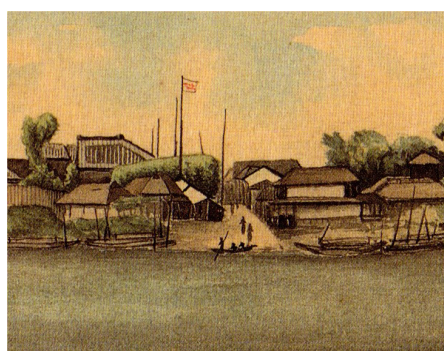
八重洲や霞ヶ関周辺には中央官庁や軍関係の施設が、浅草清松町辺りには寺町が広がります。整然と区画された日本橋周辺には商家らしき家並が多く見えますが、池袋や新宿はもちろんのこと、赤坂や信濃町付近から西には、ウサギやタヌキが往来をわがもの顔で駆けそうな田園風景が続きます。

地図表現に注目しますと、都心の大きな建造物の屋根や庭園、並木の一つひとつも、ていねいに表現されていて、それは楽しいものです。外務卿井上馨が主唱して落成したという鹿鳴館では、毎夜のようにきらびやかな舞踏会が催されたのでしょう。地図に見える洋館とその庭園から、紳士淑女の散策する風景が連想されるのは、著者だけでしょうか。

また、関東周辺には縮尺2万分1の「迅速測図」と呼ばれる彩色地図も残されています（「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」）。この図からは、当時の関東平野に広がる市街地や主要街道のようすが分るとともに、田や畑の区別ばかりではなく、松、杉、桐、梅、桑などといった詳細な植物区分が読み取れます。

そして何よりも目を引くのは、地図の欄外に描かれたスケッチです。地図に含まれる代表的な風景や土木構造物が描かれています。これら色彩豊かな地図には、明治期の関東平野や東京が埋め込まれていて、百年を経過した今でも、絵画を見るようにその時の風景を彷彿させるものがあります。

明治初期の地図技術者を養成した陸軍士官学校教師には、洋画家、漢画、浮世絵をする者も多く在籍していて、地図技術者には数学、測量、製図・印刷技術ばかりではなく、書や絵画の指導も受けたといいますから、技術者にはレオナルド・ダ・ビンチのような広範な技術と能力を求めたともいえます。



「迅速測図」に書き込まれた「視図」と呼ばれるスケッチ
国土地理院発行「第一軍管地方二万分一迅速測図原図」

【散歩の途中で】

「美しい日本の歴史的風土 100選」を訪ねる

（下記からいくつか選定する）

http://www.kotohazon.or.jp/pdf/100sen_kekka.pdf

埋立地は誰のものか

封建時代の国界（くにざかい）、そしてこれを引き継いだ明治期以降の県界や市区町村の界の多くは、自然地形に沿う形で決められてきました。

その界の対象になった川や湖といった内水面と呼ばれる水域には、林地などの入会地と同じように為政者が決めた界を超えるような、周辺住民の漁業権や水利権が存在していて、個人の所有権は存在していないというのが普通です。

そのとき、川や湖の中にある国界は、川幅や湖岸にまで及ぶ太いグレーゾーン状だったといえます。

現在はどうかという、水面を含んだ河川敷などは、原則公有地です。

そこに、周辺住民の河川や湖面での漁業権をそのまま存在させながら、河川を中心などに細い線を引いて、便宜的に行政の界としています。水面に境界杭を打つことはできませんから、線を引くのは、地図の上だけの話です。封建時代と全く同じです。

そして、市町村にとっての当面の利害は、面積に係わる交付税の高だけですから、太っ腹な気持ちなら、少々のは問題はならないでしょう。

では、湖や海ならどうするのでしょうか、また新たに埋め立てた土地ならどのように決めるのでしょうか。

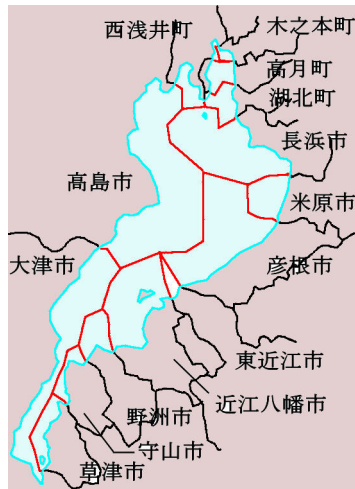
決め方はいくらでもあります。

- ① 陸の界をそのまま直線状に延長する
- ② 直前の陸の界が河川中心線にあるときは、その中心線の延長をそのまま延長する
- ③ あるいは、河川中心線から海や湖の中の川（^{みお}滞）の中心線とする
- ④ 水際線に直角な方向とする
- ⑤ そして外国の例ですが（ペルーとチリ）、赤道と平行な線とする

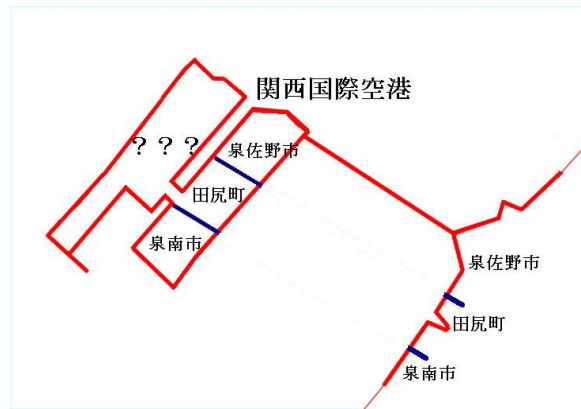
このように、関係者の主張は多彩で、決め手になるものはありません。

そのことから、面積の広い湖面や利害が明らかな埋立地の境界は、なかなか決まりません。さきごろ、十和田湖にかかわる県境が廃藩置県から 137 年を経て、来年初にも確定するとのニュースがありました。十和田湖以上に^{みお}琵琶湖の行政界は、平成 19 年 9 月 28 日に図のように確定しましたが、これらの線引きには苦勞の跡が見えます。

そして、霞ヶ浦、東京湾、伊勢湾などの埋立地の一部は、いまでも行政界が未定です。



琵琶湖の新しい行政界



関西国際空港埋立地の行政界

では、大阪湾泉州沖に浮かぶ関西国際空港では、どうなっているのでしょうか。図のように、従来の水際線近くにある行政界を、どこまでも延長したような線で区切られています。

居住する住民はいないでしょうから（住民登録している人はいるようです）、その点での問題はないとして、空港から出されたゴミなどは、どの市町が処理しているのでしょうか（水道は泉佐野市が、消防は広域組合が、ゴミは民間会社が担当しているとのこと）。

野次馬としては、さらに拡張された部分の行政界が、どのように延長決定されるのかも楽しみです。そして、同じように拡張を続ける羽田空港の場合は、どうなるのでしょうか。

紛争を恐れたからではないと思いますが、計画中のD滑走路は 多摩川の中心線からはみ出さない、東京都内に収まる工事計画のようです。

【散歩の途中で】

関西国際空港周辺の観光スポット

- ・ 関西国際空港 / 大阪府泉佐野市泉州空港北 1
- ・ りんくうプレミアム・アウトレット / 大阪府泉佐野市りんくう往来南 3-28
- ・ りんくう公園 / 大阪府泉佐野市りんくう往来北 1-271
- ・ みさき公園 / 大阪府泉南郡岬町淡輪 3990
- ・ 箱作海水浴場（ぴちぴちビーチ） / 大阪府阪南市箱作 3346 番地先
- ・ 大阪府立大型児童館ビッグバン / 大阪府堺市南区茶山台 1-9-1

食べられるチメイ



「東西蝦夷山川地理取調大概図」の「チエトマイ」地名
地図中央上、現稚内市の宗谷岬東

お断りしておきますが、著者は地図人です。しかも、美食にはほど遠い位置にすることを、自ら強く保証します。ですから、今回のお話も、美味しい食べ物の話？には違いありませんが、地図・地名とのかかわりで興味もっただけです。

食文化研究家の永山久夫さんによると、南米のオリノコ河畔に住むというオットマッグ族は、土をこねたダンゴを焼いて食べるといいます。また、ニューギニアやアフリカの土着民は、どうしても塩分が不足するときに土をなめ、塩を含んだ草束を焼いた塩灰を食べるともいいます（『たべもの古代史』永山久夫著）。

世界各地にこのような習慣があるようですが、日本ではどうなのでしょう。

明治 6（1873）年に北海道開拓使に雇われ、調査測量のために各地を訪れた測量長 M. S デイが開拓使に提出した「北海道測量報文」には、次のようにあります。

「宗谷を過ぎて最初の宿泊所を『チエトマイ』といい、そこは番屋一軒と土地のものが住む小屋が数軒といった漁村である。ここには、変わった泥土があって、土地のものはこれを肉のように野百合の根とともに煮て食べる。ここの本当の地名『チエトイナイ』は、『喰土の谷』という意味である」とあります。

また、北海道の名付け親として名高い松浦武四郎の著書にも同様な記述があって、トマ（延胡索（えんごさく）と呼ばれる早春に青色の花を咲かせる野草）、ハー（野百合）とともに煮て、これにチエトイ（喰土）を入れ、これに鱒の卵と油を少し加えて食したとあります。

お味の方はどうだったのでしょうか。

「始めには、臭気に困ったが、後には馴れてうまいと思うようになった」（北蝦夷餘誌）とあります。平戸藩主松浦静山の「甲子夜話」によると、最上徳内も蝦夷地でこれを体験したようです。

訪ねたことはありませんが、長野県小諸市には天然記念物「テングノムギメシ（天狗の飯）」という喰土の産地があり、ここにあるのは「藍藻」といわれる黄褐色の微生物や菌類からなる土で、飢饉の時に食べたことに始まり、同じような喰土は同県他所にも多くあるといいます。本州の人にも、土（珪藻土）を食べる習慣があったようです。

その、「チエトイナイ」「チエトマイ」「チエトマリ」「チエトイシュンナイ」「チエトイウシ」などの喰土にまつわる地名は、かつて北海道各地にあり、現在では転化した戸井（とい、chi-e-toy）、東別（とうべつ、toy-pet）、豊似（とよに、toy-o-i）、豊別（とよべつ、toy-pet）などがあります。



さー、皆さんも、この簡単なレシピをもとにユリ根とかまど用土の煮つけを食してみてください
はいかがでしょうか？

ただし、その後の体調変化について、地図人の私はまったく責任を負いません。

【散歩の途中で】

北海道のリゾート地（名）の意味

- ・ キロロリゾート

（〈kiro-ru〉キロロ：は、踏み固めた広い道のこと。俗には、「心」の意味を持つともいわれています）

- ・ トマムリゾート

（〈tomam〉トマム：湿地や泥炭地のこと）

- ・ ルスツリゾート

（〈ru-sut〉ルスツ：道の根元のこと）

- ・ サホロリゾート

（〈sat-horo?〉サトホロ：乾いた広い場所のこと）

- ・ ニセコリゾート

（〈nisey-ka-un-pet?〉ニセコ：切り立った崖のことから）

- ・ フラノリゾート

（〈hura-nu-i〉フラヌイ：臭いを持つところ、硫黄などの臭いのことか）

尾瀬沼の渡し船（1300 字）

「夏がくれば 思い出す はるかな尾瀬 遠い空・・・」といえば、おなじみの尾瀬（群馬県・福島県・新潟県）を歌った「夏の思い出」の歌詞です。

尾瀬は、この歌にある春だけでなく、四季を通じて、訪問者の身も心も楽しませてくれます。

私が初めて尾瀬を訪ねたのは、昭和 41 年の春でした。上野駅からの夜行列車が夜も明けきらない沼田駅に着いたときには、すっかり熟睡していて、危うく寝過ごすところだったのをいつまでも覚えています。そのときは、雪解け水に晒されたような鮮やかな白色の水芭蕉を堪能して帰りました。さらに、朝もやの中で漁をする老女をのせた小舟が尾瀬沼に浮かぶ景色にも遭い、それは幻想的なものでした。

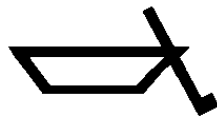
私の次の尾瀬訪問は、昭和 45 年です。

ニッコウキスゲが小さな丘を黄色に染める夏でした。そのときは、地形図修正のために一週間ほど滞在しましたから、主な山道をすべてと行ってよいほど歩きました。

さて、その尾瀬国立公園の、尾瀬ヶ原と並ぶ散策ポイントである尾瀬沼に、かつて「渡し船」があったのをご存じですか。

尾瀬沼に登山道が開かれたのは明治 22 年、最初の山小屋が尾瀬沼の西岸沼尻に開設されたのが明治 43 年のことでした。この小屋は、陸地測量部の地形図に開設者の平野長蔵さんにちなんで「長蔵小屋」と記入されたことで、以後この名前と呼ばれるようになったのだといいます。

当時のようすは、大正元年測図の 5 万分の 1 地形図「燧ヶ岳」で確認できます。その後、曲折はありますが、沼の東岸に小屋を移転したが大正 4 年だったそうです（昭和 6 年要部修正測図にみえる）。当時は登山客も少なく、長蔵小屋の主は、養魚、養狐なども手掛けていたといいます。



渡し船（舟かじによる通船）

そして、昭和 33 年要部修正測量の地図には、小さな船に櫓がついた渡し船（舟かじによる通船）の記号が見えます。

しだいに尾瀬には、観光客が殺到するようになり、西岸のさらに西、沼尻には第二長蔵小屋も開設して（昭和 31 年）、登山者に便宜を図るうえから、東西岸を結ぶ渡し船が開設されたのです。

この間、明治・大正から太平洋戦争をはさんで、尾瀬ヶ原の水源を利用する発電計画があり、戦後になって群馬県から福島県へ抜ける道路計画が持ち上がったのです。一方で、尾瀬の自然を守るための反対運動も起きました。

その結果、本来目的は「沼畔の植物を守るため」に対岸の沼尻まで渡し船を運行していたのですが、「渡し船こそが沼を汚し、静寂を破っている」と非難されたことを受けて、木道の整備を機に、これを廃止したのです（昭和 47 年）。

昭和 42 年夏からは、ボートも釣りも禁止されたそうですから、私が見た、朝もやの中の小舟は最後の風景だったようです。

昭和 33 年修正の地形図には、あの渡し船の記号とともに、尾瀬沼から三平峠と書かれたあたりに取水口と水色破線の地下水路が表現されています（昭和 24 年に取水工事が完了）。そして、昭和 48 編集の地図では、渡し船の記号は消え、三平峠の南には、その後建設が中断された自動車道路が迫っています。

この間の地形図を見るにつけ、当時の世相とともに「尾瀬」の歴史の刻々を正確に記録しているということに地図技術者として誇りを感じるとともに、こうした地味な地図作りを、後々まで引き継いでほしいと願っています。



長蔵小屋が西岸にある
1/5 万地形図「燧ヶ岳」大正 6 年測量



長蔵小屋が東岸にある
大正 6 年測量、昭和 6 年要部修正



長蔵小屋（東岸）と沼尻小屋の間に渡し船が
昭和 33 年要部修正、昭和 37 年修正測量

【散歩の途中で】

各地の湿原のビジターセンターなどを訪ねる。

- ・ 尾瀬沼（尾瀬沼ビジターセンター 福島県檜枝岐村尾瀬沼畔）
- ・ 霧多布湿原（霧多布湿原センター 北海道厚岸郡浜中町四番沢 20）
- ・ 戦場ヶ原（日光湯元ビジターセンター 栃木県日光市湯元）

- ・霧ヶ峰 八島ヶ原湿原（長野県霧ヶ峰自然保護センター 長野県諏訪市霧ヶ峰 7718-9）
- ・中池見湿地（中池見ふれあいの里 福井県敦賀市樫曲奥堀切 79 号）
- ・くじゅう坊ガツル・タデ原湿原（長者原ビジターセンター 大分県玖珠郡九重町大字田野 225-33）